

前回までのあらすじ

やみひめが（ルイン）から解放されたタイミングで世界は紅く染まり、ある種の『波動』が放射された。それはオオミヤ・シティの地下空間で状況を窺^{うかが}っていたサクヤヒメにも影響を与え、神話と呼べる時代の記憶を取り戻し、この世界が改変を繰り返している事に気付いた彼女は、しかし目的を変える事はなかった。

動力源としていたやみひめを失った（ルイン）を庇^{かば}い、サクヤヒメがやみひめ達の前に立ちはだかる。（ルイン）に取り込まれているハイデマリーの救出を訴えるやみひめだが、サクヤヒメはそれを受け入れず対立してしまう。

一方、アイナやルイゼ達と、サクヤヒメが呼び出した『骨』を思わせるティラノサウルス型の機獣との戦闘は、想像を絶する結末を迎えた。ティラノ型が（ルイン）に捕食されたのだ。それはサクヤヒメの意図した結果だったが、彼女は動力源を取り戻した（ルイン）によって背中から貫かれてしまう。

絶体絶命とも思えたサクヤヒメを救ったのはカナコだった。退避した病室で、責めるでもなく、飄^{ひょうひょう}々とした態度で接してくるカナコに、サクヤヒメは自分の行動に疑いを持ち始める。

同じ頃、オオミヤ・シティの外でも大きな状況の変化があった。惑星全域に発生していた〈ブレケース〉の群れが、一斉に東方大陸に移動を始めていたのだ。

※登場人物紹介は[こちら](#)

ゾイカルやみひめ -結-

オオミヤ・シテイに出現した超巨大機獣（ヘルイン）への一点突破攻撃作戦——（BO作戦）には、立案者のロゼット・コダールが把握していない参加者が多く存在する。むしろ、そちらが大多数と言っている。通常の通信手段が遮断されているため、コンピュータ・ネットワーク上に作戦概要と開始時刻を述べた動画がアップロードされ、それを見て参加、あるいは作戦に便乗して独自の行動を取っている者がほとんどだからだ。

ミズキ・オイカワもその一人だった。

「——ロケット・ペアアンチッ！」

ミズキが突き出した右腕に左手を添え、構えと同時に叫ぶと、右の手首から先が文字通りロケットの如く射出された。正確には圧縮した機力を炸薬変わりにして腕輪を撃ち出しただけなのだが、そう錯覚するだけの迫力というか説得力のようなものが少女の発した言葉にはあった。

「もういつちよ！ フィンガー・ミサアアイルッ！」

両腕をまっすぐ伸ばし、十本の指先が撃ち出され、すぐに生えてはまた撃ち出され、無限に指先が発射され続ける。これもそう見えているだけで、実際には指先から機力の弾丸を機関銃のように連射しているだけだが。

「これでトドメ！ ブレスト・ビィイムッ！」

胸を張り、両脇を閉め、足は肩幅に開き、胸部のV字の板状部品から破壊光線を発射する。これももちろん機力の応用であって、光学兵器とか光子力的な何かではない。

高速で飛来する腕輪を叩きつけられ、何百発もの機力の弾丸を浴びせられ、最後に高密度に圧縮した機力を体内に照射され、（ブレイクス）は仰向けに倒れた。それを確認し、ミズキは背を向け、発動言語を口にする。

「——滅せよ！」

直後、体内に照射された機力が威力に転化し、（ブレイクス）を粉碎した。実際には臓物や体液が飛び散り悲惨な絵画のはずなのだが、不思議とそれは火薬の爆発のように見え、逆光がミズキの雄姿を讃えているようだ。

くどいようだが、あくまでそんなイメージというだけである。

「あれが（バスター・マシン）……」

「そういえば、あなたはミズキ先輩が実際に戦うの見るの、初めてだっけ？」

「は、はい。なんというか……すごいですね」

「そうね……ええ、やっぱりすごいわ」

人間は理解を超えたものを見ると笑うという。やや半笑い気味の後輩の（機獣少女）二人の会話に、ミズキは内心で苦笑した。

ちなみに〈バスター・マシン〉とはミズキに付けられた『二つ名』である。彼女のファンの中には〈スーパードロイド〉と呼ぶ一部の古参もいて、本人もそちらを推しているのだが、『それはない』という意見が大多数を占めているため定着していない。

「ふう……」

「おつかれさまです、ミズキ先輩。……その、大丈夫ですか？」

一息つくくと、同行していた別の後輩が労ってくれた。機力の活性値が下がってきたため、ミズキは半年ほど前から予備役となり、戦場には立っていない。その空白期間を含めたの発言だろう。

「ああ、うん。大丈夫だよ。勝利をこの手につかむまで、あたしの勇氣は死なないッ！」

「は、はあ……」

ぐっと拳を握って見せたが、後輩には意図が伝わらなかったらしく、ぽかんとされてしまった。余談だが、今のはミズキの好きなロボットアニメの主人公の台詞である。

すると――

「――ミズキ？」

建物の屋根伝いに移動してきたらしい人影が着地し、ミズキの名を呼んだ。黒い袴のMBジャケットを身に着けた、長い黒髪の〈機獣少女〉である。

「……カナコ!？」

カナコ・T・シングウジ。

ミズキの友人にして、同じ高校二年生。同じ事務所に所属している〈機獣少女〉の同僚でもある。

ミズキが旧知の相手に驚いた理由は三つある。一つは彼女が消息不明と聞かされていたため。もう一つは、彼女がサングラスのような半透明の黒い面を付けていたためだ。

「そう。あなたも駆り出されたのね」

「うん。あたしもまだ戦えるし――って、そうじゃなくて！」

あまりにカナコが普段通りすぎて、普通に受け答えしてしまった。同時に、普段通りの友人の様子に安心もした。心配したし、聞きたい事もあったが、もうどうでもいい。

ただ、これだけは訊かない訳にはいかない。ミズキが驚いた三つ目の理由。それは――

「――きゃあああああっ!？」

悲鳴を上げたのは同行していた後輩達の一人だった。

「どうしたの!？」

「……あ、ああ――」

残りの二人も言葉にならない様子で、震えながら指を差す。その先に視線を向けると、

一キロほど先に（ルイン）の姿があり、その巨大な爪が和装の女性を背中から串刺しにしていた。〈機獣少女〉の強化された視覚は、女性が吐血する生々しい様子まで捉えてしまった。

「うっ……」

胃が締め付けられ、熱いものが逆流する感覚を抑えられたのは、再会したばかりの友人があまりに冷静だったからかもしれない。

「——兄さん、彼女と一緒に行ってください。ミズキは私の友人です」

「……判った。気をつけてな」

ミズキがカナコの登場に驚いた三つ目の理由——それは彼女が抱えていた少年の存在だった。

（……お兄さん？ この人が？）

カナコは十二歳以前の記憶をなくしているが、兄がいた事だけは覚えてしていると聞いた事がある。

「ミズキ、この人をお願い。私の大切な人だから」

「ちよ、カナコ……!?!」

ミズキの返事も聞かず、カナコは（ルイン）の方へ向かってしまった。あの串刺しにされた女性は知り合いなのだろうか。だとしたら、カナコの反応は冷静すぎる気もするが。

「——カナコ！ ゼンジン病院！ そこが避難所だから……!」

一瞬で遠ざかる友人の背に呼びかけたが、果たして聞こえたかどうか。

「えっと……カナコのお兄さん？」

取り残された少年——カナコと同年代に見えるが、兄というなら年上だろう——に声をかける。体格は中肉中背。男性としては少し長めの黒髪と、どこか物憂げな雰囲気^{ものう}が、カナコに似ているといえれば似ている気がした。



「嗚呼もう！ ムカつくわ！ なんなのよ、あいつ……っ!!」

キリエ・ソウマは苛立^{いらだ}っていた。病室で（ステインガー）の化身であるサクヤヒメと別れてから、ずっとこの調子である。

「ねえ、そう思わない!? 思っでしょ!?! 思いなさいよ!」

「えっと……そ、そうですね？」

「ちよっとバイセン、私とモカに当たらないでもらえますか？」

絡まれて困惑するモカ・カワイと、齒に衣着せぬ対応のリツ・ミナト。三人は灰色の『骨』を思わせる機獣との戦いで行動不能となり、救援に来ていた〈機獣少女〉達によってこの避難所に運ばれていた。MBジャケットのおかげで三人とも怪我や後遺症はなく、こうして自由に動ける程度には回復したため、その後の経緯を聞き、結果的にカナコに任せる形で病室を後にする事となった。

「〈戦姫〉は〈戦姫〉で、なんかずっと話しかけちゃいけないオーラ出してるし……」

「そうなんですか？」

「私達にとつては、シングウジさんって普段からああいイメージだけど」

キリエのぼやきに、最近までカナコと交流がなかったモカとリツは意外そうな反応をした。

「普段からああだけど、ちよつと違うのよ！」

「……ごめんなさい!？」

「だから、モカに当たらな——パイセン、前！」

「へ？ ——ぎゃー！」

振り返りながら怒鳴るキリエにリツが注意を促したが遅く、彼女は誰かにぶつかり足を滑らせてしまった。

「もう！ …どこに目えつけてんのよ!？」

完全な前方不注意を柵に上げ、ぶつかった相手に暴言を吐くキリエ。しかし相手の男性は怒るでもなく、彼女に手を差し出した。

「あ……悪い。大丈夫か？」

「大丈夫じゃな——」

手を差し出された相手の顔を見るなり、キリエの怒りは急速に鎮静化し、別の部分が気に沸騰した。

「あ、いえ………大丈夫です——」

急にしおらしくなり、言葉尻は蚊の鳴くような細かい声になってしまったが、男性は気にした様子はない。手を引かれ、立ち上がったキリエに怪我がないのを確認し、立ち去ろうとした相手を思わず呼び止めた。

「——あの、お名前を！」

「え？」

それはそうだ。交通事故ならまだしも、ちよつとぶつかっただけで名前や連絡先を聞く事は普通しない。あるとすればチンピラの脅迫くらいだろう。

「——お兄さん！ こっち手伝ってくださいー！」

「ああ！ じゃあ、呼ばれてるんで」

関わからない方がいいと思われたのか、救いの声に呼ばれ、彼は逃げるように行ってしまった。

「……パイセン、なに今の？ まさか慰謝料請求する気だったわけ？」

「さすがにそこまでは……」

「……………」

リツとモカが何か言っているが、キリエの耳には届いていなかった。彼女の視界には去っていく彼の背中しか映っておらず、その唇はただ夢見るように一言だけ呟いた――

「……………素敵――」

「はあ!? ちよろすぎるとしよ、パイセン。え、今ので？ どんだけ……」

「でも、確かにイケメンさんでした」

「なに？ モカも、ああいうのが良いの?」

「私はリツ先輩が一番ですよ?」

「……………馬鹿じゃないの――」

「ええ!! ひどいですよっ!」

リツとモカのやり取りは、やはりキリエの耳には届いていなかった。

「お兄さん、何やってるんですか」

「すまん。なんか、妙な娘に絡まれて」

ミズキと共に避難所となっていたゼンジン病院に移動し、そのまま彼女の手伝いをさせられていた橘アサトは、そう言って弁解した。

「あれ？ ソウマさん?」

「知り合いか?」

まだ視線を感じる気がして、アサトは振り返らず訊ねた。

「はい。彼女も（機獣少女）で、カナコをすごくライバル視してるんですよ」

「へえ。ライバルねえ……」

「カナコはすごいんですよ? 聞きたいですか?」

自分の事のように得意げな表情を浮かべるミズキの様子に、普段からこうしてカナコとも接してくれているのだろうと想像し、アサトは妙に嬉しい気持ちになった。地球からゼヘナに転移し、記憶を失った状態で過ごしたカナコの約五年間――アサトの体感時間では約三年だが――は、つらい事も多かっただろうが、それだけではなかったのだと彼女の存

在が思わせてくれる。

同時に、すでに此処ゼンが今のカナコの居場所になっているのだとも感じた。

「……………」

「お兄さん？ どうしました？」

「なんでもない。それより、次は何をするんだ？」

「あ。じゃあ、配給の手伝いに行きましょう。やる事はいくらでもありますよ？」

にこやかに言うミズギ。本音を言えば、やらなくていい事は極力やりたくないのだが、この笑顔で言われてしまうと満更まんざらでもなくなる。男おとこというのは悲しい生き物だ。

ミズギは取り立てて美人というほどではないが、愛嬌があつて可愛らしく、何より接しやすい。しかも——

（地味カワ巨乳か……）

本人の性格と同じ、おとなしめの服ファッションの上からでも、その自己主張の激しいたわわな膨らみは一目瞭然である。実にけしからん。

さておき——今は何かしていた方がむしろ気が紛まぎれる。

それに、この状況ではさすがにだらけてもいられない。街から脱出出来ず取り残された者や、〈B.O作戦〉に参加し負傷した〈機獣少女〉が、相当数この場に集まっている。ミズギを始めとする〈オフィス・タカマハガラ〉の〈機獣少女〉は、彼等を護るために留まっていたらしい。

「そういえば、カナコが連れてきた和服の女性、すごい怪我けがに見えたが」

ミズギが別れ際に叫んだ声は聞こえていたらしく、間もなくしてカナコは避難所であるこのゼンジン病院にやってきた。アサトは状況を正確に把握出来てはいなかったが、あの女性を助けに行ったのだろう。

「そうですね。でも、あれだけ冷静に大丈夫って言われちゃうと……」

和装を血塗れにした件くだんの女性を抱え、やってきたカナコは開口一番にそう言った。彼女の『大丈夫』は、『大丈夫だから関わるな』と言われた気がして、見舞いと称して様子を見に行くのも憚はばかられる。

カナコの兄と友人。立場は違えど、両者が今はそっとしておくべきという結論に落ち着きかけた時——

「——うおっ!？」

「——きゃっ!？」

轟音と共に建物自体が激しく揺れた。



全高六十メートルの巨体がビルの谷間を悠然と通過する。長い尾が遅れて続き、全長はその倍はあると思われる。ほぼ直立し、発達した前足は腕と呼んだ方がしっくりくる。大きさも相まって、その姿は怪獣と呼ぶに相応しい。

〈破滅〉のコードネームを与えられた規格外の超巨大機獣。

それは『骨』を思わせるテイラノ型的大型機獣を捕食した事で、より手の付けられない状態となっていた。

ビルの陰から顔を出した直後、その頭部を高密度に圧縮した機力の砲弾が襲う。直撃だが損傷はなく、ヘルインは砲撃ポイントと思われる地点に人影を発見した。

ツバキ・タカチホ。

手にした弓のようなMBデバイスと、身に纏った袴のMBジャケットから、その姿は弓道を連想させる。

ヘルインが報復のレーザーを地上に撃ち込むと、ツバキは後退しつつ同じ部位に、正確にもう一撃を浴びせる。やはりダメージはないが、挑発は成功したらしく、ヘルインの視線が釘付けとなった。

「〈分断するもの〉——」

ツバキが注意を引いた隙を狙い、流遠やみひめがビルの屋上からヘルインの頭部に降り立つ。

「その威を寄せ！」

すかさず発動言語。目標から対象となるものを切り離す能力は、しかし弾かれるようにして無効化された。

(やっぱり駄目か……)

そんな気はしていた。これまでやみひめは、自分の力を『出来る』という確信の下、直感的に使ってきた。しかし今回は、ヘルインの体内からハイデマリーを救い出すイメージが出来なかった。具体的に対象が囚われている場所が判らないとか、目標が大きすぎるとか、そういう事ではない。もっと重要な要素が欠けている気がする。

(ハイデマリーの意思が感じられない。眠りが深い？ それとも、何かに邪魔されてる……?)

弾かれた勢いそのまま自由落下しつつ、やみひめは考える。途中、ヘルインの太く長い尾の一撃を受け、しかしその反動を利用して距離を稼いで着地する。答えは出ない。

すぐさま援護射撃が来る。地上からヘルインを掠めて上空に抜けた三角柱のミサイル

の側面が傘のように三方に開き、内側に満載していた小型ミサイルが雨のように降り注ぐ。この〈機獣少女〉らしからぬ攻撃はアヤカ・シユバイツァーによるものだ。連携が困難であるため、今は〈ヤミヒメ〉を降りてMBデバイスを使って援護してくれている。彼女とはまだ一度も、きちんと意志疎通を取れていないが、不思議と安心出来るというか、ずっと前から存在を知っていたような感覚すらある。〈ヒナミ総力戦〉で、意識を失う直前に背中を見た時もそうだった。

「……!?」

小型ミサイルの着弾で発生した爆炎と煙が、内側から照射された紫色の光に消し飛ばされた。光は拡散し、周囲の一切合切を無差別に襲う。

「――〈防ぐもの〉!」

紅い防壁を展開し、紫色の光線を防ぐやみひめ。

防壁の範囲を素通りした光線がビルの壁面を貫き、上層が自重で瓦解し、付近の建造物を巻き込んで次々と倒壊していく。前方には全身から件の光を拡散放射する〈ルイン〉の姿が見える。捕食したコアの影響か色が紫に変化しているが、荷電粒子砲の応用だろう。

全方位を無差別に襲った拡散放射が収まると、〈ルイン〉は天に向かって咆哮を上げ、今度は口腔から荷電粒子砲を放った。天に伸びた紫の光はやがて、衛星軌道に到達した『輪』に届き、増幅・偏向され――地上に降り注いだ。

衝撃が奔り、光が一面を包み込んでいく。



「……………」

オオミヤ・シテイの惨状をモニター越しに目の当たりにし、ロゼット・コダールは言葉をなくした。それは〈L. C. ファクトリー〉の地下施設で、彼女と同じ光景を見た全員がそうであるように。

だが、いつまでも呆けてはいられない。東方大陸が事実上の無政府状態の今、行動を指示してくれる者はいない。それが出来る者がいるとすれば、『ロゼット・コダール』を襲名した彼女だ。

受け継いだ技術は〈ステインガー〉の封印施設のメンテナンスのような、国の安全や機密に関わるものも多いため、何時しかその影響力は一技術者の域を超えていた。『ロゼット・コダール』が受け継ぐのは技術だけではないのだ。

「……………はあ」

息を吐き、決断する。

「——オオミヤ・シテイ全域に避難命令を出してください。残留している市民を非常用のシェルターに収容します」

戦場となっている中心部を離れ、身を潜めていけばやりすごせる状況ではなくなった。何時、その場が荷電粒子砲で消し飛んでもおかしくない。街を脱出するのが理想だが、そもそも取り残された多くが、移動が困難な者達のはずだ。仮に脱出出来たとしても、集結しつつある〈ブレイクス〉が見逃してくれる保証などない。

「シェルターの場所と道筋をあらゆる手段で発信。一応、通常の通信も試して。その後、我々もこの施設を放棄します」

……………

ロゼットの言葉に全員が固まる。彼等はあくまで〈L.C.ファクトリー〉という企業の社員に過ぎない。最高責任者の言葉とはいえ、業務内容を逸脱した——今更感はあるが——指示に困惑するのも無理はない。

「——了解。どれだけスピーカーが生きているか不明ですが、警報を鳴らしてみます。アナウンスは……自分でやるしかありませんね」

沈黙を破ったのはロゼットの補佐代行を務めているシオリ・ユウキだった。普段と変わらぬ淡々とした口調で、通常業務をこなすように指示を実行する。

「状況が落ち着いたら、所長の奢りで祝勝会ですね」

「シオリ……いいよ。好きなもの、じゃんじゃん頼んで！」

「だそうですよ、皆さん」

上司と、その補佐の、普段の調子のやり取りに当てられたのか、あるいは考える事を放棄したのかは不明だが、困惑していた所員達もやるべき事を始めた。

「言質、取りましたからね！」

「安い店はなしですよ！」

「大丈夫！ 請求書は新政府に回すから！」

「所長、せこいつすよ!？」

「新政府が出来ていればの話だけだな……」

「……あの！ 自分、これが終わったら所長と一対一でお食事を——」

「なっ?! てめえ、どそぐさに紛れて抜け駆けかよ!？」

「だったら俺も——」

「そういうのは補佐の私を通してください」

軽口を叩きつつ、誰も手は止まっていない。改めて優秀なスタッフに恵まれていると感

じながら、ロゼットは苦笑した。

「でも、それからどうする? 〈ルイン〉という根本的な脅威に対して、もう打てる手なんて――」

「――おや? 意外と活気がありますね」

「あ、ロゼットいた! ねえ、どういう状況!? なんか大変な事になってるけど……!?」

ちんにゆうしや
闖入者の存在に、再び場に沈黙が下りる。

姿を見た事くらいはあるかもしれないが、ロゼット以外の誰も彼女等ときちんと面識はなく、ロゼットにしても突然の登場に驚かないはずがない。

ツバキと共に惑星ゼヘナに来訪した異邦人。

姉のタオエンと妹のベアトリーチェ——キリエと共に消息不明となっていたフアフロウ姉妹である。

「え、ちよ……今まで何処に!? それより、大丈夫なの!? 怪我とかしてない!? ああもう、何から訊くべき……!?」

「落ち着いてください、ロゼットさん。まずは深呼吸を。そして、私をぎゅっと抱きしめてください——さあ」

「……タオ姉、お願いだから空気読もうよ」

テンパるロゼットに、タオエンは満面の笑みで両手を広げ、ベアトリーチェはそんな姉を冷ややかな表情で見つめていた。

第四十四話

最後の希望

場所は変わらずへL・C・ファクトリー」の地下施設。

惑星ゼヘナに帰還したばかりだというファフロウ姉妹に、ロゼットは彼女等が消息を絶つてからの出来事を、大まかにだが説明した。

「なるほど。その機獣から人間の姿に進化を遂げたという女性——とても興味深いですね」
姉のタオエン・ファフロウが落ち着いた様子で——しかし期待に満ちた表情で——真つ先にそう言った。

見た目は高校生くらい。緩く波打つ銀色のセミロングに、瞳の色は神秘的な金色。ぱつと見はクールビューティといった印象だが、物腰は穏やかで、しかしやや性格——とか性癖——に難があるのが玉に瑕だ。

「タオ姉、今重要なのはそこじゃないと思うよ?」

妹のベアトリーチェ・ファフロウが呆れた様子で言った。

「こちらは十二、三歳くらい。茶色のショートヘアに、瞳の色は黄玉を思わせる黄色。

見た目通りの無邪気で可愛らしい性格だが、並の機獣少女とは比較にならない戦闘力を秘めている。

彼女等は「エグゼキューター」という存在だそうで、見た目は普通の人間の少女と変わらないが、タオエンは狐のような、ベアトリーチェは猫のような、耳と尻尾を備えている。ロゼットも触らせてもらったが、作りものではなく、ゼヘナの人間でないのは明らかだった。

「何を言うのです。人外美少女——いえ、美女ですか——との接触ですよ? 浪漫ではないですか」

「人外って……」

無表情だが口調は興奮気味なタオエンに、ベアトリーチェが苦笑を浮かべる。ロゼットからすれば二人も人外——あくまでゼヘナ人ではないという意味で——なのだが、ベアトリーチェの表情にもそういった意味合いが感じられたのは、気のせいだろうか。

「姉さん、説明は以上で充分ですか?」

「ん——だいたい判った」

タオエンの問いにそう答えたのは、彼女と同年代と思われる少女だった。確信が持てないのは、彼女が祭りで売っているようなお面で顔を隠しているためだ。タオエン曰く『極度の人見知り』だそうだが。

お面で顔を隠した少女の名前はヤミヒメ・ファフロウ。

姓が示す通り、二人の姉だそうだ。確かに以前、故郷を飛び出した姉を追って旅をしていると聞いた事があった。知人に『ヤミヒメ』がいるとも聞いていたが——だから流遠や

みひめを『やみ子』と呼んでいた——姉の名前だったようだ。その姉と合流し、ようやくゼヘナに戻ってきたという事らしい。つまり、別の星を経由して。

ちなみに服装は共通の意匠デザインで、細部は異なるが、二人とも魔女のような帽子と外套マントを身に着けている。そのため隠れているが、恐らくヤミヒメにもなんらかの獣の耳と尻尾しっぽがあるのだろう。

「……いつも思うけど、ホントに判ってる？ ヤミ姉？」

「ほう？ 随分と生意気な口を利くようになったな？」

下の妹の疑問に、ヤミヒメは静かな口調で答えた。怒気はなく、威圧するような口調でもなかったが、ロゼットは自分に向けられた訳でもないのに背筋に緊張が走った。ベアトリーチェも同様らしく、びくっと身を震わせ、タオエンの背中に隠れてしまった。

「姉さん」

「むっ……」

ベアトリーチェの髪を撫なでながら、タオエンはヤミヒメをやんわりと窺たしなめる。今の反応を見るに、別にヤミヒメも怖がらせるつもりはなかったのだろう。姉妹仲が悪い訳ではなく、長女と二女の意思疎通コミュニケーションが上手く取れていないという事だろうか。

「不味まずい時に戻ってきちゃったね」

ともあれ、今は他所よその家庭問題を気にしていられる状況ではない。ロゼットは話を進めさせてもらう事にした。

「私達はもうすぐ避難するけど、あなた達はどうする？」

避難命令は出せる限りの手段で発信した。あとは別室で進めている、機獣少女達の補給と整備が終わるのを待つのみである。避難してしまえば、それでもロゼットに出来る事はなくなる。

「もちろん、状況に対処します。そのために戻ってきたのですから」

ファフロウ三姉妹の次女は、そう言つて微笑を浮かべた。



避難所として機能していたゼンジン病院から、続々と人が吐き出されていく。ロゼットの発した避難命令に従い、身を寄せていた者達が移動の準備を始めたのだ。中には動かすのが困難だったり、危険な患者もいたが、病院そのものが消し飛ぶ可能性と天秤てんびんにかけた結果だった。

オオミヤ・シテイの市街地で行われている戦闘は、すでに『戦争』と呼べる規模に拡大

している。

「――」

カナコは人の流れを見送りながら、サクヤヒメがいる病棟びょうどうに視線を向けた。彼女は今も病室に一人で残っている。人間なら即死の重傷を負ってはいるが、いざとなれば自分の身を護るくらいは出来るはずだ。無理に連れ出す理由はなく、そこまで世話を焼く義理もすでない。〈ルイン〉から助け出した事で帳消チャウした。

そう納得させ、カナコはアサトとつないでいた手に力を込めた。

「カナコ……？」

隣で困惑する兄の胸に、こつんと寄りかかる。心音が聞こえる。少し鼓動が早くなったのが、自分を意識してくれている証拠だと嬉しくなる。

「兄さんは私が絶対に護りますから」

たとえ、何を犠牲にしたとしても――そう内心で呟つぶやき、カナコは今の幸せを噛み締めた。

ミズキ達が避難民の誘導をしていると、ちらちらカナコとアサトを遠巻きにしていたキリエが、取り乱した様子で言った。

「……ど、どういう事？　なんで〈戦姫〉いくさひめが、あの人とあんな親しげなの!？」

「あれ、カナコのお兄さんだよ。そういえばソウマさん、さつき何か話してたよね」

ミズキは答えながら、先ほどアサトがキリエを『妙な娘』めづかしいむすめと言っていたのは黙っておこうと決めた。絡まれては彼も迷惑だろう。彼女とはそこそ長い付き合いなので、性格も把握している。

「お兄さん!?　そんなの初耳なんだけど……!？」

「シングウジさんの事なら何でも知ってるみたいな言い方に聞こえますね」

「……パイセン、どんだけ好きなのよ？　もう完全に好きの裏返しじゃない」

モカとリツの声を潜めた会話が背後から聞こえた。キリエには聞こえなかったようだが、いつそ聞こえていけば矛先が変わってありがたかったかもしれない。ちなみにミズキも、二人に完全同意である。

(ソウマさんはカナコに対して気持ちを拗こじらせちゃってるだけなんだよね……)

いっそ素直になれば、あっさりと良い関係になれると思うのだが、キリエの性格では難しいというか不可能だろう。非常に難儀だ。

「あはは……」

「笑い事じゃないわよ！ っというか、兄妹の距離感としておかしくない!？」

「どうだろう。あたし、一人っ子だし」

「いや、明らかにおかしいでしょ!？ あんなのまるで、か……カノジョじゃない!？」

これは面倒くさい。救援を呼ぼうと振り向くと、すでにモカとリツの姿はなかった。火の粉が及ぶ前に去ったのだとしたら、大した危機察知能力だ。

アイナ・ボーグマンとルイゼ・ルンシユテッド。

共に〈獅子王シンシオウ〉と〈竜帝リュウテイ〉の『二つ名』で呼ばれた〈機獣少女キジュウショウ〉だったが、先の激戦による消耗のためか、MBコアの活性値の著しい低下が確認された。

「この戦いが無事に終わったとしても、我々はお役御免だろうな」

「お互い、もうすぐ十九ですもの。ここまで続けてこられた方が、むしろ奇跡ではなくて?」

「そうだな」

「ですわよ」

並んで視線は合わさず、どうでもいい世間話でもするようなテンションで、移動開始を待つ群衆を眺める。

「〈機獣少女キジュウショウ〉でなくなった私に、何が残るだろうか」

「女子大生というブランドが残りますわ」

「……それは何か役に立つのか?」

「……合コンの場とか?」

どちらも真逆の意味で大学生には見えない容姿だが、共に同じ大学に通う一年生である。

〈機獣少女キジュウショウ〉の仕事を理由に、サークル活動などにはまるで参加してこなかったため、女子大生でありながら女子大生らしい事は何もしてこなかった。世の女子大生が何をするのかも、その程度のイメージしか湧かない。

「なるほど。無駄にハイテンションで、ハイタッチしながら——」

「たしか……そう、こうやって——」

『うーい』

と、二人が極めて微妙なノリで声を合わせてハイタッチした瞬間——

オオカミ
狼のような黒い巨大な何かが現れた。

相当な距離を跳躍してきたようだったが、着地は軽やかで、周囲に被害を及ぼすよう

な事はなかったが、二人は即座にMBデバイスを起動し、臨戦態勢に移行する。背後では当然、騒ぎが起きているが、目の前の狼オオカミがじっとしているためか、恐慌状態には至っていない。

「……機獣、なのか？」

「そのようですが……」

群衆を背に、アイナとルイゼは全神経を目の前の巨体に集中する。先に交戦した『骨』を思わせるテイラノ型に比べるとかなり小さいが、それでも人間からすれば十分に巨大で、それだけで脅威だ。

すると、その場で止まったまま、狼の頭部が機械的な動きで上に開いた。

「……子供？」

「……女の子、ですわね」

そう。開いた狼の頭部には座席シートがあり、紅い髪あかの幼女が座っていた。服装はメイド服で、目を完全に覆い隠す紅い眼鏡ゴーグルという、異様にすぎる見た目である。

「——敵ではありません。橘たちばなアサトという男性を探しています」

幼女が立ち上がり、此方こちらを見下ろして言った。随分と落ち着いているが、声は普通に幼い。体格からいって十歳くらいだろうか。

「どこかで聞いた名だな」

「……あ。ヒナミ・シテイに向かった際、同乗していた彼では？」

警戒は維持したまま、幼女を刺激しないよう言葉を交わす。〈ヒナミ総力戦〉の舞台となったヒナミ・シテイに向かうホバーカーゴに、高校生くらいの少年が確かに乗っていた。アイナ達は目的地で降車したが、彼はそのまま、〈スティングァー〉の封印施設に向かうメンバーと同行したはずだ。

「——紅桜べにお！」

すると、一人の少年が群衆の奥から現れた。高校生くらいの見た目で、男性としてはやや長めの黒髪。見覚えがある——というか、件の橘アサトだった。

アサトが騒ぎに気付き〈ヤミヒメ〉の下に駆け付けると、風防窓が開いた操縦席コクピットには紅桜べにおの姿しかなかった。

「アサト、探しました」

初対面の時と変わらぬ淡々とした様子で、紅い髪あかの幼女はアサトを見下ろして言った。
「一人なのか？」

「アヤカはMBデバイスで戦っています。なので、アサトの所に行くよう指示されました」
それはつまり、またアサトに乗れという事か。

「この状況だから仕方ないが……正直、俺じゃ大した戦力にならないぞ？」

〈ヤミヒメ〉が保管されていた格納庫から此処オオミヤ・シテイまで搭乗し、赤いテイラノ型機獣と戦闘もしたが、大した戦果は挙げておらず、アヤカに文字通り席を譲った。

「私はそう思いません」

「何を根拠にそう言えるの？ 戦果はともかく、兄さんの身体にかかる負担は見過ごせないわ」

アサトの言葉を否定する紅桜に、追ってきたカナコが苦言を呈した。彼女の意見ももつともで、実際、戦闘直後に〈ヤミヒメ〉から降りたアサトは、その場で倒れ吐血までした。あれからまだ二時間と経っていない。

……………。

紅桜は答えず、カナコも眼鏡の幼女から視線を外さない。

アサトにしてみれば、なんとも居た堪れない沈黙が続く中、上空を高速で駆け抜ける二つの飛行物体があった。

「飛行型の〈機獣少女〉ですわね。ひよつとして……？」

「あの二人かもしれないな」

アサトが駆けつける直前、紅桜とやり合っていたらしい〈機獣少女〉二人の会話が背中越しに聞こえる。どうやら空を飛ぶ〈機獣少女〉もいて、上空を通過したのがそれらしい。

彼女等に気を取られてくれていればよかったのだが——残念ながら紅桜とカナコの静謐な睨み合いは続いていた。

アサトに非はないが、原因は自分であるため、どう収めるべきか思索していると——

「——っ!？」

一瞬で大量の情報が頭に流れ込んできた。

言葉で説明されたなら、理解するまで一時間では利かないような内容であるにも関わらず、そのすべてを『受信』した直後に理解出来ていた。

異常な感覚のはずだが、不思議と落ち着いていられるのは、直前に似た体験をしていたせいかもしれない。波動としか言いようのない感覚と共に、この星の神話と呼べる時代の光景を幻視したのだ。

「……兄さんも？」

目が合うと、カナコははつとした表情でそう呟いた。紅桜の方に視線を向けると、彼女も無言で頷く。少なくとも二人は、アサトと同じ情報を受け取ったようだ。

〈ヤミヒメ〉が姿勢を低くし、犬で言うところの『伏せ』をする。

「……………はあ——」

大きく嘆息し、後部座席に紅桜べにざくらが移動したのを確認すると、アサトは再び〈ヤミヒメ〉の操縦席コックピットに乗り込んだ。

う
う
く

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『ゾイヤミ』第四十四話をお届け致します。

今月の執筆は久々に地獄でした。プロットがまとまらない。書き始めると坐骨神経痛で足が痛い。腰も痛い。そのために集中力が削がれる。

健康って大事。

でも、そんなつまらない事は言いたくないし、癩しやくなので健康であるための努力なんて絶対にしたくない……ッ!! (子供か)

タオエンとベアトリーチェが帰ってきたぞ！ 新キャラ(?)の長女もいるぞ！

だけど今回、いつも以上に地味な内容ですが、こんなの方が書きやすい。

段取りの戦闘シーンは書きたくない！ だって小説なんだから……ッ!!

良きところで謝辞を。

まずはいつもの紙白さんに感謝を。ロゼットの存在が偉大すぎて、なんか変に申し訳ない気分です……。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。年内に終わらせそうな気がしてきました。もうちよっとだけお付き合いのほどを。

今回の更新に合わせて追加した『小説の作法』も目を通していただけると幸いです。

2020 / 9 / 14 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女インカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第3部』小説ページに戻る